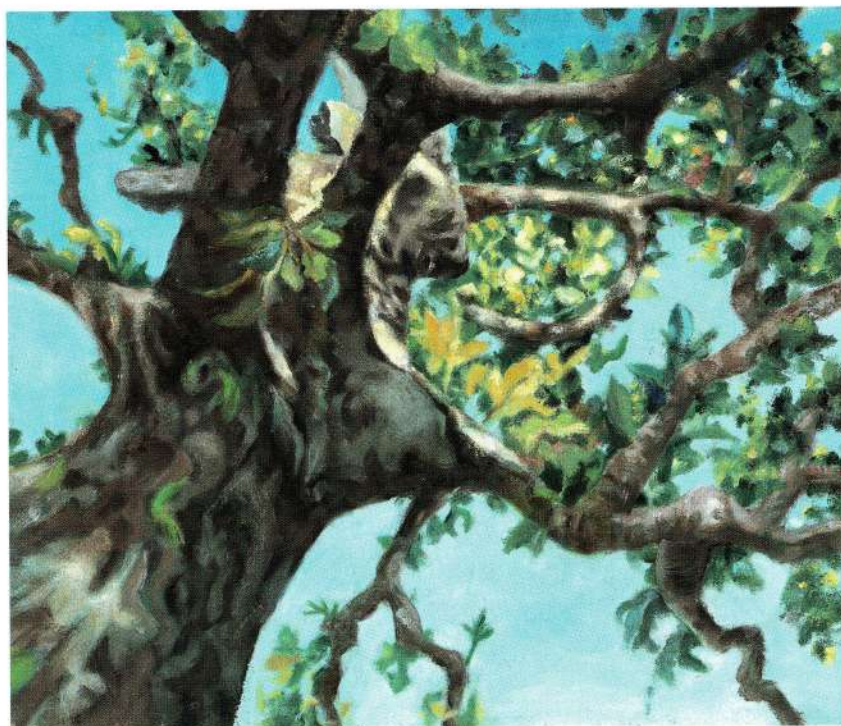


村野次郎創刊

香蘭



2023年(令和5年)4月号

小特集 新年本社歌会

第100卷

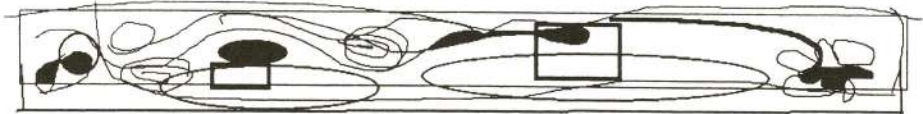
第4号

通卷1108号

二〇二三年(令和五年)四月一日発行(毎月一回一日発行)

香蘭

第一〇〇卷第四号



香 蘭

2023年(令和5年)4月号
 小特集 新年本社歌会
 第100巻 第4号 通巻1108号

目 次

村野次郎作品 私の愛誦歌(92) 関 哲行 : 表二
 近詠十五首 初春 庄 司 健 造 : 2
 作 品 一 4

二 26
 三 40
 推薦香蘭集 48

香 蘭 集 49
 作品一特選(二月号) 朝香・飯島・石井・江口・柏原(義)・鈴木(順)・

長野・中村(か)・満木・宮口・宮原・
 作品二、三特選(二月号) 小笹・小原・田中・中村(陽)・松沢・三神・
 安田・河野・竹田・田村・徳測・原(礼) 16

一頁公論(23) 辞書から得たもの 柏原 義 清 15
 村野次郎への旅(156) 千々和 久 幸 20

小特集 令和五年 新年本社歌会 近 藤 純 33
 エッセイ・自由研究 思い出の父——短歌と釣りと 丸 山 三 枝 子 54

焦 点(二月号) 挽歌の形 谷 本 ・ 大 島 (昌) ・ 原 (卜) ・ 干 川 56
 七 首 抄(二月号) 石 井 雅 子 57

岡 元子「ぬけがら」評(二月号近詠十五首) 伊 藤 美 惠 子 58
 作 品 評(二月号) 作 品 一 55
 作 品 二 60
 作 品 三 62

香蘭集 小 笹 岐 美 子 64
 澤 田 久 美 子 66
 江 口 ・ 大 美 賀 ・ 宇 野 69

緑 地 帯 田 中 あ さ ひ 70
 耳言あれこれ(17) 小 林 幸 子 76

明宝研究会第一三六回一月例会 明宝研究会 会員作品評 長 野 道 子 78
 他誌拜見126 82

歌会及び会合・会員消息・他 82
 編集後記・新宿日記 表三

表紙絵 中村 陽子「春ひかる」 目次・緑地帯カット 和 田 和 雄

このをとめさしてよき子にあらねども

何となくわれの心をひくも

『樗風集』

この歌は昭和二年、先生が三十三歳の時の作品で、『樗風集』の最後から二番目に掲載されている。

「よき子にあらねどもわれの心をひく」「をとめ」とは一体どのような人なのか、この歌を讀むだけでは不明で想像するしかない。

昭和二年頃の作である。当時を想うと地方から出て来た「をとめ」で、ある時先生が酒席の場で接待をしたのであろう。しかし先生はお酒は全く飲めなかつたと聞く。酒飲みは適当にあしらっておけばいいが、素面の先生の前ではそうもいかず、困った「をとめ」。よき子にあらずと表現したのではなからうか。

でも「をとめ」は素朴さや素直さを持つていたので、先生は気になつたのであろう。

「さしてよき子にあらねども」と言いつつも「何となくわれの心をひく」のフレーズに先生の優しい気持ちが表示されている。

先生の優しさと、如何様にも取れるこの謎めく歌に私は惹き付けられている。

(短歌新聞文庫版『樗風集』117頁。『村野次郎三
百首』には収録されていない)

四選者の作品

ザックバラン 平塚 千々和 久幸

わたくしをどこまで演じ切れるのか五階に朝の寒卵割る
ワクチンを接種しました鬼ごっこような戦争はじき終わります
妻亡くしし男の胸中いかにかと問われて寒中見舞のきたる
短歌など詠んでる場合に妻に逝かれはザックバランという態なるに
悲しみは少し遅れてやって来ん青首大根が土盛り上げて
歯ブラシにトイレットペーパー螺子回し妻のあらねば買いに走れる
いつか来た道がやっぱり懐かしい戦争と聞けばおのず弾むを
丘の上の団地の明かり確かめて家路急ぎし若き日ありき
今の気分は 東 京 桜 井 京 子
一日に三個つつ食べるチョコレート最後にいつも二つが残る
しよつばいと不味い時だけ言ふ人が何も言はなくなる日恐ろし
向かうから無灯火の自転車がやつて来るそんな世界だ今の気分は
縁石に落葉が吹かれ何も言はず何もしなくていいと囁く
幾日が過ぎてても既読にならぬままあなたの背が遠ざかりたり
嫉妬する三歳のころ三歳の手を引き冬の公園に来つ

貰はれてゆきたる私の花梨ジャムお邪魔ならむかどこぞの家で
ふるさとの庭に積も雪いまごろは見てあるならむ子どもわれが
一二等に当る 横 浜 渡 辺 礼比子

この秋も旅は叶わず道の辺の楓もみじに心慰む
町一の豪邸の庭に照り映ゆる京の古寺にも劣らぬモミジ
たまさかに書き損じたる一枚がお年玉籤二等に当たる
病み上がりの夫にてあればてっぺんの十ほどの袖子は採り残したり
城ヶ島公園恒例大根の販売はなし コロナのせいです

この年も渡り来たりし鶺鴒の鳥ら冬陽を浴めり城ヶ島の崖に
逆光のわれは真黒く写されぬ(馬の背洞門) 背にして立つに
潮だまりの岩退けたれば透き通るカニの仔の出づまだ眠いよと

喪の夜 鎌倉 高 昌 憲 子

霜月の二十四日のあかときに赫かがやくひとつ星あり
魂のひとつこの世を離るときのかがやきを見つ明けの赫星
亡き人のみちびきといふ言の葉がすんなりとわが胸処に落つる
つながりは人から人なり霜月の終りに集ふ歌のえにしに
霜月のふくらかなれる三日月が葬りの屋根の端にかかれる
物思へと語るがごとく月は照る令和四年のこの喪の夜半を
生前の笑顔こそよけれ苦しみより解かるるは皆ひとしみななる
朝焼けの空一枚を保存する秋のスマートフォン冷たさ

作品一特選



(二月号作品から)

桜井京子 選

旅する蝶

東京 朝香 ふさ枝

近づきつ離れつわれのめぐり舞う浅葱斑に身じろぎできず

藤袴の香りゆたけ伊豆の里旅する蝶が翅をやすめる

藤袴の花に群れいる蝶々よ韃靼海峡いまま渡るか

夕されば石路の咲く裏山へ流れをなして蝶は入りゆく

浅葱斑の群れなす中に入りてより蝶の幻影まなうら離れず

・浅葱斑に魅せられた一連、三首目は安西冬衛の詩を下敷とする。

ワールド・カップ

川崎 飯島 智恵子

会場はカタル気温は四十度ラクダも参加す開会式に

どうしても一点ほしい引分けて終えたいドイツ相手の初戦

「堂安」^{どうあん}が一点入れる引分けて終るも良しと水飲みに立つ

守りではG・K「権田」^{けんた}を中心にピンチ再三しのいできたが

勝った 勝った なんだれなしゆく人波に抑えようなき涙こみあぐ

・大会の興奮をリアルタイムで詠い、あの日の感動が甦る。

ミサイル

習志野 石井雅子

旨寝せし列島の朝飛び越してア二ハセヨー、ミサイルが降る

文化の日の朝のテレビは一斉にミサイル通過のJアラートで

野田さんの追悼演説の感動を告げたき夫の今日は命日

柿なんて買ふもんぢやないと言ひし夫ことしも頂きましたと供ふ

ペンギンも気分乗らない時がある今朝の散歩は二羽だけでゆく

・一首目、度重なるミサイル発射だが軽くない可哀しみがある。

子と住む

柏 江口 絹代

ひと晩で木の葉がどんと落ちる夜があるのだそうなはるけき遠野

高名な建築家設計の図書館が建設されて遠野が遠い

リユック背負いどこか遠くに行きたいと『OZTRIP秋の電車旅』を買う

春咲きの球根買い来て庭先に半年先の未来を埋める

十月の窓辺でニヤンと鳴いているクロの心に夫は棲まうか

・五首目、亡き夫は今も生きてこの家族を見守っている。

縞 蛇 は

尾道 柏原 義清

午前四時二度寝予防にスイッチを入れるテレビはCMばかり

いつか見たテレビドラマの「相棒」を忘れて居るから初のごと見る

あつ嫌いた、振り向かぬまま過ぎて来ぬ如何になりしかあの縞蛇は

「この様な事が二度とはない様に」毎年桜が咲くのと違う

わがひと世かわりし人数かぎりあの人が居たこの人は今

・五首目、作者の今は豊かな交遊の記憶の中にあり感慨深い。

雪ほたる

札幌

鈴木順子

木枯らしが空をまると塗りかえて光を求め雪ほたる飛ぶ
まつわるは亡き父母か雪ほたる白黒写真はただ静かなり
寝そべてひとつふたつと量の目数えては待つ時の過ぐるを
己が身はバズルのピースの一つにて満員バスの隙間にはめる
霜降りし庭の空気を破るよに君が目覚めて枝が揺らいだ

・四首目、バズルの隙間にあって一ピースの喜怒哀楽がある。

霜月あれこれ

横浜

長野道子

チチとなくカネタタキのいるらしくテレビの裏よりニュースに割り込む
五日ほど共に暮らせるカネタタキ居候なれば真夜なきくれぬ
柿の木のありしところの空高く独身に戻るような更地なり
つわぶきは花せりだして咲きあふれ霜月なかばの雨に打たるる
基礎疾患持ちたるわれは危険なる人物なるらしつね見守られ

・二首目は人間臭いカネタタキ、自身を投影し温かな眼差しがある。

パン

福岡

中村かよ子

目の前のパン一枚とコーヒーとこんなものから私は出来ている
どうやってパン一枚が六時間私を動かすしゃべるし泣くし
原因があつて結果があるなんて嘘だらガラガラポンの世界に
英雄と戦犯の間を行き来するサツカー一夜さあホイッスル
閉じられた三角形の心地して女友達は三人がよし

・一連に通底するアンニュイ、五首目は閉塞感と危うさが同居する。

紅葉狩

川越

満木好美

A Iが電話の向こうに應對すわが言い分は軽く流して
住所氏名電話番号は聞き留めてわが言い分は流すA I
峠道の紅葉に花を添えること穂すすきがみなそそけ立ちおり
どの年も紅葉狩りの写真には同じ服着たわたしが写る
赤かぶの漬物たつぷり作りたり減塩食の母には内緒

・何気ない日常の中から掬い上げたウィットで読者を楽しませる。

昨夜の夢

東京

宮口弘美

三人がパソコンキーを打っている 音はそれだけ休日出勤
新しきイベント嫁に知らざるるジェンダーリビール和菓子愛らし
産声をあげし赤子を胸に抱きわたしの息子が父になった日
掃除機に洗濯機そしてスマホまで壊れて終いに母も逝きたり
母逝きて孫が産まれてわが日々の悲喜こもごもを送りする

・悲喜交々の今を懸命に生きる作者の鼓動が聞こえる。

風に咲きたり

倉敷

宮原迪恵

いま咲きましたという香りにてお隣の金木犀は風に咲きたり
窓に見る山茶花の花は雨に濡れぐらんぐらんと冬が近づく
男の孫のいない食卓は蓮根の穴を数える今日の夕食
何事もなきひと目にてそれもよし昨日と同じ蝶の来ている
道ゆけば土手の草々もみじしてダックスフンドになりたき秋よ

・ありふれた日常だが、底流にはそこはかとなほ寂寥感が漂う。

作品二、三特選



(二月号作品から)

高 島 憲 子 選

〈作品二〉

未婚の甥

鎌 倉 小 笹 岐美子

富士山は白くて綺麗だったよと嘆く日来るか温暖化の果て父になる自分はイメージ出来ないとう未婚の甥よ誰でもそうさ亡き父の愛用したるこの時計老いた娘の腕には重し
刀剣を美術館に見るこの国の民に戦は相応しからず

・二、四首目、時事問題を角度を変え鋭く詠む。二首目、甥への温かなエール。

する時は何時

鎌 倉 小 原 裕 光

思い草と残しおきしを妻の手に敵のごとく筆り取られぬ
調剤を待つ間じっくり眺めたり(塗る孫の手)の微妙なる反り
みやげにと貰いし練馬大根を抱え乗り込む師走のバスに
いつまでも同じポスター貼られる決断実行する時は何時

・二首目に可笑しさ、三首目に勢いがある。四首目、選挙ポスターへの辛

辣な目。

青い《無》

取 手 田 中 あさひ

自然薯の蔓の触れむとするとところ仰げばそこはただに青い《無》
秋の陽はほろびへむかふものたちに燦々とふる嘉することく
黄金色に身を染めたつてそれが何 そこには触れ得ぬかがやく葉むら
一夜にて黄金の葉むらは失せにけりはじめから何もなかつたのだ
・一首に文語と口語を巧みに織り込み、無や滅びを詠んで明るさがある。

暇つぶし

東 京 中 村 陽 子

土に還るまでのひと世の暇つぶし手を汚しつつ油絵を描く
秋の日が光と影を作りたる部屋にわたしの静かな時間

塀に沿う蔓草の根をがむしやらに引き抜けば少し後ろめたくて
赤銅の皆既月食見上げおり地球の空はミサイルが飛ぶ

・香蘭表紙絵でおなじみの作者。暇つぶしと言いながら大切な時間を持つ。

中三の秋

さいたま 松 沢 みどり

雨降りの日曜は少しけだるくて頭痛のくすりを息子とわける
中間テスト、数学検定、北辰テスト 中三の秋は試されてばかり
学校に休みの連絡いれるとき電話に出るのはいつもの教頭
「お母さんも大変ですね」と言われたり直接会ったことはなければど
「プレッシャー半端ないよ」と息子が言うわたしは何をしてやれるだろう
・受験生の母の心情に共感。五首目、まさに親心。見守るしかないのだろう。

電車の中で

愛 知 三 神 進

吊革の際に洩れくる切れ切れのきちんと聞きたいカーペーターズ
又ひとつ横文字の競技あらわれてルール知らぬ間に揚がる日の丸

瓦礫から兵士に抱かれ生還のミサイル知らぬ首輪なき大

プーチンが額を曝す映像に幾億刺さる眼の矢弾

・二首目、先の五輪をシニカルに詠む。三首目、首輪なき大が象徴的。

初期の初期

行田 安田 恵子

噴水の高く吹いてはくだけ散る潔しとは覚悟すること

徒花と知ればさみしき花ざくろ空屋の庭に乱れ咲きしも

空気まだ動かぬ朝に密やかにわれひとり飲む梅酒を仕込む

しっかりとマスクの上の医師の眼を見すえつつ聞く癌の告知を

「初期の初期」医師の言葉のふた文字がさわく心を鎮めゆくなり

・四、五首目、癌の告知を受ける場面。何事もしつかり見すえ、歌に詠む

作者。

〈作品三〉

母の納骨

鎌倉 河野 慎二

佇立てて軽く弾んで駅前雨の路上に打つて出るなり

父眠る墓所の開くや秋晴れの空に蝶舞ふ母の納骨

父の待つ墓所に入れたる秋の日の空が眼を吸ふあお母さん

また別の部屋で雨聴く童貞のまま逝きたる君の忌日に

幾たびかギターで食つてゆく夢を語りし者を思ふ冬の日

・母の納骨という忘れがたい日を「空が眼を吸う」と独特の表現に詠む。

かみ締めて聞く

大分 竹田 美智子

先生にもう死にたいと伝えるともう秋ですねと静かに笑う

看護師さん聴診器あてて胸の上心の中が見えてきませんか

香蘭誌を持ってぬ私は作品三を探してもらい何度も読みぬ

ヘルパーが作品評を見つけたし読んでくれたりかみ締めて聞く

暦では早や冬至なりまだ秋を満喫したくもみじをうたう

・三、四首目、自作への歌評をかみ締める作者。生きる力が湧く。

いよよ輝く

東京 田村 久美

青空に橙色の実をつけて柿の木は立つ秋の真中に

はぜもみぢの葉表に淡く日の差して枯れ際の今いよよ輝く

銀杏の葉ひとつひとつにまつさらな朝の光の透けて明るし

真直に天に伸びゆく銀杏の木よあなたは秋に愛されてゐる

・叙景に倣し、清々しさがある。四首目、下旬に発見があり詩心豊か。

曾孫らの秋

柏 徳淵 育子

ラインにて運動会や学芸会つぎつぎ届く曾孫らの秋

痛ましや前立腺の事までも報道さるる天皇陛下

もう餌を食べなくなりしみどりがめ日浴びており冬眠まえに

駅前のモスバーガーの美味しさよそれにつけても食べづらきこと

・曾孫の様子をライン動画等で視聴するのだから。現代である。二首目の
優しさ。

茶の花

横浜 原 礼子

こつそりと夫の摘み来し茶の花を挿し木にしたり庭の片すみ

子に戻る夫かポケットに松ぼっくり、椿の蕾、椎の実詰めて

西行の足跡たどる西行展書簡の文字に生き様を見る

・二首目から夫の様子がわかる。その老いを憎まず、労りの目が温か。

初 春

庄司 健造

卯の跳ねる年となるらん未年ひつしのわれはゆっくりゆっくりと行く

元旦のそら晴れわたり清らかな光が窓に注ぎ込むなり

食卓の片方に初日およびきて君と二人で御神酒いただく

〈加賀鳶〉は真の辛口 浄めたる思いのしたり元日の朝

穏やかな初春となり今年こそ己の歌を詠みたきものよ

隆々と天に伸びゆくプラタナス春の息吹の香蘭の表紙

窓の辺に活けられてある紅梅は七草のあさ満開となる

新春の朝日を纏う少女はも駄への角を折れてゆきたり

二つ三つ花咲く梅の下枝にはおみくじ数多むすばれており

一年の息災ねがい黙々と鏡開きのおしるこを食たぶ

コロナ禍の三年みとせに何を失うや二十九人の新年歌会

ひと言随想

ずっとこける

一輪の河津桜が花ひらき歓声あげてスマホ寄り来る

寒風のバス停に立つ老夫婦そよぐマフラーお揃いの赤

田畑でんぼたの寄附同意書に捺印させたな町は私のふるさと

ゆつくりと生きゆくことに決めました三苦の一ミリ忘れぬように

この五月で八十歳になる。この歳を機に、
ゆつくりと生きて行こうと思っている。

せっかちな性格の故もあるのだが、昨年は
二度もこけてしまった。一度目があつたので
気を付けてはいたのだが……。歩き慣れた歩
道ではあるが、凸凹で暗くもあり、この時刻、
めつたに車は来ないから安全だと思つた事が
判断ミスであった。歩道と車道の段差が、こ
れほどまでに高いとは思わなかつた。つまり

空足を踏んで顎をしたたかに打ってしまった。
あのクリスマス夜の夜から一ヶ月、歯科医の世
話になりながら、やつと咀嚼ができる迄に戻
り、後悔と反省の新年を迎える事になってし
まった。「今年は跳ねる年に」などと思ひあ
がつていたが、見事に打ち砕かれてしまった。
年相応にゆつくりと、と思ひながらも、やる
気と気概は失いたくない。酒のせいとは死ん
でも言わないが、どうぞ皆様もお気を付けて。

大正期の「香蘭」(十七)

千々和 久 幸

前回に引き続き「香蘭」大正十五年(1926)八月號の前月歌壇合評を読むことにする。評者は杉浦翠子、酒井廣治、橋本政一、村野次郎である。

○ (一) 東京のくらしは苦し父にあひ金貰はむとかへるふるさと 細井 魚袋
(二) 日の光硝子にあたる部屋の中がらんとひろくあかるかりけり (翠子)
(一)の歌、つまり金銭上の苦痛をよみこんだ歌はこれまでも幾度も々々見せられて、いつでも同じ程度の冷笑が浮ぶばかりであります。その癖作者は生活を重大に詠つてゐるのである。かう云ふことは短歌にならぬのかと疑はせられる時私は頭を掉る。もつと、上皮を剥がして肉の爛れと、血の流れを見せせて呉れ、ば、作者の苦痛に接しられよう。かう云ふ内容の歌を見ると、啄木のうまさ

聯想することが出来る。
(二)は、連作であらう。これだけでは主人公が逃げ出したあとの家へ行つて借金取りが茫乎として居るやうな形である。

(政一) 金無心、八首からなる一聯のうち序の二首である。(二)は一寸肯定されさうであるが(二)の歌には透徹したる感情の流れがない様に思へる。作者の意圖は四五句から推定するとかへりゆくふるさとへの感興の様にも考えられこの歌の中心点を稀薄ならしめてゐるので上句が生起して來ないのは遺憾である。
(二)の歌は平面描寫以上に出てゐない。語調もごたついてゐて尊敬されない歌である。
○ われは船に汝は岸邊にあひ見つつ離れんとする月のさびしさ 生田 蝶介
(翠子) 生田氏位十年一日その歌の色彩を變へない人は少ない。いつまでも若い、そしてい

つまでも白粉の匂ひで居る。このお歌の前書に「黒髪のやうに重く垂れさがつて水にとどいて居る柳が」とある。柳の總やかさを女の黒髪に形容するのも生田さん故である。
私のやうな、想像貧弱者には、柳の枝を見て黒髪を形容するに、あまり柳が大で黒髪が小でならない。且つ野暮天な私には、寧ろ馬の尻尾に似たりとも云ひたい。粉飾を好む讚詩には「髪を洗ふが如し」など、柳を形容したのがあつたやうである。

このお歌、二首とも芝居の舞臺面を見て作つたやうである。こしらへ物を本物らしく見せたがる柳があつて、朝妻船か何か、浮いてゐる。江戸時代のだらついた風をしてゐる好色の男女が、秋波を送りあつて居る。背景には動かないお月様が出てゐると云ふ場面である。「ちよいと、おやすくないわよ」と二階の見物人の中に聲があつた。
(政一)氏の歌は一部の青少年特に通俗雑誌歌欄投書家程度に随喜喝仰されているといふが宜なるかなである。短歌もこの程度に安住してゐられれば易々たるもので苦勞する要がない。氏などはもう態度をしつかり決めてか、つてもいい、頃と思ふ。この歌の批評は敬遠す

る。

○ (一) ひらひらと鷺を飛ばせて浪かともうこく夏野は青あらしなり

(二) 逃水にげみずはいづこ廣野は霞むらの風のすゑに鷺をあげたり 芥川 徳郎

(廣治) 第一首の境地は充分感得出来るけれども全體に調子を重んじた結果感興に基づく内的表現が不充分のため迫真感が薄い。格調を重んずるのは良いがそれに供つて内に迫る感動の力か慾求があつて欲しいと思ふ。「浪かとも」と云ふ氣力のない言葉は成るべく避けてもつと具象的な表現が望ましい。第二首は全體がたくししてゐる。四五句律動に押し出された言葉のみ目立つて内容に空虚なところが見へる。

(次郎) 飛ばせては嫌味である。夏野の青あらしだけで、野の青草原まで現れるだらうか。一首全體にもつと躍動させる感激を表はしてゐていい。(二) 前評者の言を正當と思ふ。

○ ゆふぐれをひとり斯く來てわたるなる眞間のつぎよ繼橋つぎはし葉櫻のもと 眞間寺のさくらの並木の夕道に這へる毛蟲を

憎まざりけり

依田 秋雨

(廣治) 淡々と歌はれながらその練達な詠み振りは流石凡手でないことが覗はれる。手先きでなく骨裡より出るものであると云ふことを首肯される。第一首何ら奇なくして而も結句なぞしつかりと据つてゐる。第二首は佳作と思ふ。

(次郎) さしたる難は認められないにしても、微温的である。一首如何なる感動、如何なる新味を現はさうとしてゐるのか判らない。上句冗漫に過ぎ下句従來の域より出てゐないやうに思はれる。(二) 何かしら特殊の境地を見出さうとしてゐる、それはよい。けれども毛蟲を點出する情景として上句は説明に墮してゐるやうである。それに夕道に這へると云ふと毛蟲が大層大きく思はれるが私だけの感じであらうか。

村野先生の「香蘭寸鐵」「編輯後記」からその要旨を抜き書きする。

○ 香蘭に對する批評 近頃香蘭がしきりに諸雑誌の批評に上る。(中略) 其批評も成程と感心するものも、なか

なかさうでないものもある。今茲で取るに足らぬものに對してまで意見を述べようとは思はない。いづれにせよ正當なる短歌道の上に立たないものは兩者に何等の益もない。只注意すべきは香蘭同人諸君が愈現歌壇の潮流に重大なる責任あることを自覺することである。

(香蘭寸鐵)

本誌七月號は仲々の好評で、書店でも大分賣れてゐるらしいとのことである。發行所の苦勞も稍酬ひられたとでも云はうか、何しろ喜ばしい。雑誌と云ふものは投稿さへしてあれば自然に出てゆくものであるなど考へるのは大きな間違である。この暑さに心をつめて努力してゐる發行者諸君は感謝さるべきである。浮ついた心で見えてゐる人は恥じてい。

○ 先月は同人會を開いて詩社の肝要事項を決定した。時に應じ北原先生御相談下さる筈である。尚先生は本社會員の爲め左に掲げた通り面會日を定めてお會ひ下さることになつた。發行所同人諸君の面會日も定めて置いたので一般會員はよろしく御利用下さい。

(編輯後記)